## 紹介

### 角山栄・川北稔編
### 『路地裏の大英帝国――イギリス都市生活史』

この著作は工業化が進展する一八、一九世紀のイギリスの「生活社会史」について、一九七七年以来積み重ねられてきた共同研究の最初の成果である。川北稔氏の「あとがき」によると、これまで「農村を中心とした生産の歴史として書かれがちであった」（傍点―原文）イギリス史を消費の面からとらえなおし、同時に対象を変貌する都市に選ぶことによって、新生面を切り拓こうとするものである。

人々の具体的な生活のあり方―「何を食べ、何を身につけ、何を考えてきたのか」（「あとがき」）―への関心は、最近の社会史、生活史ブームを支える主要な動機であろうが、日本における西洋史研究の中でも最も蓄積の豊かな分野と思われる産業革命期のイギリスについても案外こうした素朴な疑問に十分答えられていなかったという。『路地裏の大英帝国』という題名の中には、今までのイギリス史研究への批判と「路地裏」を見据えることで大英帝国の像を新たに書き直そうとする意欲がこめられているようである。

全体は九章に分れており、都市文化、家庭と消費生活、庶民の食べ物、伝染病、友愛協会、家事使用人、都市環境、レジャー、パブと飲酒、とバラエティに富む。九つの章を通じて、農村共同体が崩壊する中で、共同体がそれまで供給してきたサービスが「福祉国家」的な諸制度が整うまでの間、どのように確保されてきたかが繰り返し問われ、その際重要となる家族の役割の変化やアメニティの問題などが多様な角度で照し出される。短くて、平明なセンテンスとともに、読むにしたがってイギリスの当時の民衆の生活がリアルにわかり、都市民の息吹きが自然と伝わってくるしくみになっている。

全体の総説にあたるのは、第一章「都市文化の誕生」（川北稔氏）で、中世末以来、とくに商業革命以後から一八世紀末までの都市文化の変遷が、大英帝国の建設の歴史を背景にして簡潔にまとめられている。第二章「家庭と消費生活」（角山栄氏）は、生産の場から消費の場へ移っていく家庭に焦点をあてており、この二つの章で、都市文化と消費という本書の二つの基本視角はおさえられているといえよう。

あと各章の内容上の細かい紹介は未来の読者の楽しみを奪うようなものであり、またフランス一九世紀史が専門の門外漢の紹介者が適切になし得る所でもないので、いくつか感想めいたことを書いて紹介としたい。

まず近代史を研究する者として非常に参考になったのは、この一八・一九世紀が現代の我々の生活のひな型を作ったということが具体的な形で示されている点である。家事の記事が満載されている婦人雑誌の発行・食品公害・保険金殺人・遊覧列車にすしづめにされて海水浴場へ向う家族づれ、等々。いったい、いつの時代のどこの国の話かと問いたくなる。しかも第二章で、男女の役割分担の社会的認識が一般に受容されるのがヴィクトリア朝期であり、家事は主婦の仕事とするのが中産階級の家庭観であることを知る時、通常「封建的だ」と言われていることも含めて、いかに我々の社

会生活が深く工業化に規定されているかを痛感させられるのである。

二点目に、富を地位にかえるための消費、あるいは「衒示的消費」という社会現象である。公園をはじめとするアメニティの整備がジェントリ、後には産業資本家による地位のあかしであれば、ミドル・クラスが家事使用人を雇うこともスティタス・シンボルを得るためであり、「生活習慣は社会的に上位のものから下位のものへ伝播してゆく傾向がある」（第八章）とはいうものの、この「気どり（スノバリ）」の洪水には驚かされる。パックス・ブリタニカを謳歌する国ならではのことなのだろうか。

三点目にエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』に描かれる一八四〇年代までのイギリスと対比しながら、それ以降、労働者の生活が混乱の中にも向上していくあり様がヴィヴィッドに写し出されており、通説的に言われるイギリス労働運動の改良主義化の社会的背景が紹介者のようなイギリス史の素人にもよくわかるのである。例えばコレラの猛威も一八七〇年代には衛生改革によって鎮静化し、同じ頃、労働者の家庭でも史上初めて食べ物を選択できるようになってくる。

ところで紹介者が研究している一九世紀の後半のフランスでは、王党派対共和派、あるいは教権主義対反教権主義の対抗が生じ、民衆をまきこんだ深い社会的対立にまで発展している。この対立は第二帝制下に完了する産業革命による社会生活の変化を背景にもっていると紹介者は考えているが、これに対し、本書を読むと同時期のイギリスでは、同じ工業化による社会生活の激変は政治的・社会的対立を鎮静化する方向で作用したという印象をうける。英仏両国の工業化の惹起する変化への対応の違いに関心を持たざるをえない。

この著作は、政治史的な見取り図を作成するためにも、まず路地裏に降り立って考え直してみる重要性を教えているようである。

（A5変型版　二五一頁　一九八二年二月
平凡社　一、七〇〇円）

（上垣　豊　京都大学大学院生）

Louise and Jonathan Riley-Smith, *The Crusades*

本書は英訳による十字軍の史料撰集である。

まず序論において、十字軍の定義、背景、歴史、史料の選択規準が述べられる。この序論は興味深い。定義に関して、聖地限定論への反駁に力を注いでいることや、背景を殆ど精神的情況に局限し、経済的なそれを欠落させていることなど、論者によっては反発もあると思われるが、これなりに著者の立場は明快であり、この視角は歴史を述べる部分にも貫かれている。現在の十字軍研究の成果はよく押えられており、十字軍についての好個の概説となっている。

次いで、いくつかの項目に分類して史料の抜粋を纂集する。以下、少し冗長になるが、この種の書物の紹介にはそれが有用だと思われる故、収録されている史料を列挙することにする。但し、紙幅の都合から記述はなるべく簡略に留める。

第一章は The Preaching of the First Crusade と題して、クレルモン教会会議決議の内、十字軍士に対する贖宥の条項、ウ